

呉勝浩 小説家

オープン五周年、おめでとうございます。

わたしのデビューが七年前(2015年)ですから、ほぼ同い年、勝手ながら歳の近い兄弟の感覚でいます。

正直に告白すれば、まさか八戸市にこのような施設がつけられるとは想像もしていませんでした。不快に思われる方もいらっしゃるでしょうが、少なくとも思春期を過ごした二十数年前、わたしにとって八戸は田舎でした。文化的な情報はテレビや新聞や雑誌で得るのがせいぜい、セレクトショップだとか小劇場だとかミニシアターだとかに縁はありませんでしたし、そうしたものにアクセスする方法も知りませんでした。街を歩けば芸能人や文化人に出くわせる東京とは比べるまでもないでしょう。じっさい出くわせるかは知りませんが。

現代のネット環境はそうした地域格差をだいぶフラットにした感もありますが、一方で今も昔も変わらないのは、読んだ本、観た映画、音楽や美術を誰かと語り、共感したり意見をぶつけ合ったりするコミュニケーションへの欲求です。

当時、わたしが読んだ本や映画について語ることができたのは数名の友人と姉ぐらいでした。大人とそういう話をする機会はほとんどなかった。きっかけが見つからなかったからです。それは少し、さみしいことだったかもしれません。

チャットやSNSにも良さはあると認めつつ、けれど、その場へ出向き、作品に出会う。誰かと出会う。つまり「体験」するということは、文化の魅力を大きく膨らます可能性を秘めています。八戸ブックセンターがその一端を担ってくれたら、こんな素敵なことはないでしょう。

まったく、なんでわたしが住んでいたところにオープンしていないんだと口惜しくてなりません。同時に今の八戸の、特に若い人たちを羨ましく思います。

こうした場所は、利用したおしてなんぼです。もちろん礼節は必要ですが(そして幾ばくかの金銭も!)、利用者のみなさまは心置きなく、ふんだんにこの場所を楽しむことをお勧めします。それが運営のモチベーションとなり、文化の拠点としていよいよ根づいていくのだろうと想像する次第です。

一方で、内にこもり、孤独に黙々と活字を取り込んでいくのもまた読書の醍醐味です。スマホゲームやYouTubeといった新たな娯楽が台頭し、百花繚乱のきらいがあるエンタメ業界において、書籍、特に小説は敗色濃厚といってよい状況ですが、複雑なものを複雑なまま、ただひたすら自分の

頭と感性で味わいつくさねばならない読書という営みは、苦しさが存在するゆえに豊かさを与えてくれるとわたしは信じています。そして自分も、この営みに値する作品を書いていきたいと思っています。

五周年おめでとうと最初に書きましたが、撤回します。十年、二十年と営みはつづくのです。一歩でも二歩でも、歩みが途絶えないよう、しぶとくやっていきましょう。わたしもそうします。

呉勝浩 katsuhiro go

小説家

パワープッシュ作品『爆弾』(2022) / 「八戸市出身作家・呉勝浩さんスペシャルトーク」(2022)

1981年八戸市出身・大阪市在住。2015年『道德の時間』で江戸川乱歩賞を受賞しデビュー。2020年『スワン』(KADOKAWA)、2021年『おれたちの歌をうたえ』(文藝春秋)、2022年『爆弾』(講談社)と、3作連続で直木賞候補となっている。

